

李商隱と温庭筠（一）

——性格類型学的的研究——

塚本嘉壽*

一．はじめに

この小論は晩唐の二大詩人、李商隱と温庭筠とを比較して論じ、前者が唐代で完成された詩形、とりわけ七言律詩というそれを継承しつつ、それと共に起的であると考えられる詩想をかなり変容させたのに対し、後者がそうした詩形を一方で維持しつつも、他方で詞という新しい形式に踏みこんだ過程を、文芸学ではなく異常心理学という限定された視点から考察しようと試みるものである。

二．李商隱について

李商隱は憲宗の元和六年（西暦八一一年）、懷州獲嘉県（河南省北辺の地）に生まれた。一説には元和七年生とも言われる。字は義山、また懷州の玉谿山の道観で学んだことがあるため玉谿生と号し、長安近辺の樊川の南に住んだことがあるため樊南生とも号した。父は獲嘉県

令であり、後にある節度使の幕下に移ったが、商隱十歳の時に卒し、彼は困窮の中で学問を続けなければならなかった。大和三年（八二九）、十八歳の時、官界の重鎮令狐楚の知遇を得て、その息子の令狐綯とともに勉学に励むに至った。商隱はそれまでにすでに古文によって名を知られていたが、四六駢儷文の大家であった令狐楚の勧めで古文を捨て、駢儷文を作るようになった。

大和四年、進士科に応じたが落第、友人の令狐綯は登第した。この後も彼はたびたび受験し失敗したが、開成二年（八三七）、令狐綯の推挙を得て進士に合格した。しかし同年十一月、当時興元節度使であった庇護者の令狐楚が卒した。商隱は未だ宏詞の試験には合格していなかったので官に就くことができず、令狐綯が父の喪に服す間に、涇原節度使王茂元の招きに応じて幕下へ赴き、やがてその女嬀となった。そしてこのことが彼の生の大きな転機となったのであった。

当時唐朝はいわゆる牛李の党争という激しい権力闘争のただ中であつた。それはごく簡単に言えば、憲宗のころに宰相であった李吉甫の子息、李徳裕を中心とする貴族権門出身者の派閥と、牛僧儒、李宗閔らを中心とする進士出身者の派閥との間で争われた、約四十年にわた

*つかもと・よしひさ
埼玉大学名誉教授

る激しい権力闘争である。そこに別の新興勢力や宦官なども絡み、事態は錯綜した展開を示すことになる。そして商隠にとつて重大な意味をもつたのは、令狐楚、綯父子が牛党に属し、岳父王茂元は李党に属していた、という事実であった。彼はこの激しい争いの中で重大な背信行為をしたのであった。

ただし川合(1)は、近年、二つの党派は単純に色分けされるのではなく人の行き来もあり、また末端の地位にあつた商隠にとつてそれは大きな影響を及ぼさなかつたであろう、という研究のあることを指摘している。他方、桐島(2)はそうした説を考慮しながら、彼が宏詞の試験に不合格であつたこと、また、以後の仕途が冷落したものであつたことを指摘し、たとえ彼の地位が牛党の宿敵になるほどではなかつたにせよ、少なくとも令狐綯に不快感を抱かれたのではないかと推定している。

その後彼は秘書省校書郎となり、弘農県尉となつたが、ある事案につき譴責を受けて辞任し、岳父王茂元の幕下に入り、さらに再び官途につき、秘書省正字を授けられた。しかし母が亡くなつたため職を辞して喪に服した。翌会昌三年(八四三)、河陽節度使であつた王茂元が卒し、彼は再び有力な庇護者を失うことになつた。

その後彼は会昌五年、母の喪が明けて再び秘書省正字に就いたが、二年後には李党に属する桂林觀察使鄭亜に判官として招かれ、桂州に赴いた。翌年鄭亜が左遷されたために桂州を離れ、その後は何人かの節度使の幕下に入つたり、下級官僚になつたりすることをくり返す。

大中五年(八五二)、妻の王氏が亡くなり、また令狐綯が宰相となつ

た。商隠は綯の推挙によつて太学博士の任に就いたが、これは名ばかりの閑官にすぎず、同年、東川節度使柳仲郢の招きに応じて梓州(四川省)に赴任した。大中九年、柳仲郢は任期満ちて吏部侍郎として朝廷に戻り、彼も同行した。翌大中十年、柳は諸道塩鉄運使を兼任し、彼はその推挙で塩鉄推官に任ぜられた。大中十二年、柳が塩鉄運使から刑部尚書に移つたため、塩鉄推官を辞し、鄭州の家に帰り、ほどなく病没した。

彼は官界における立身を夢みたが果たせず、節度使の幕僚という頼りない立場と下級官僚の地位との間を右往左往し、李党の有力者の女嬭となりながら、少年時代からの友人である牛党の有力者令狐綯にしばしば頼り、ついに満足できる官職を得ることができないままに四八歳で没した。不満、焦燥、諦念に彩られた生であり、その間に彼は多くの優れた詩文を創造した。

三、令狐綯との関係

すでに進士に及第していた令狐綯が開成元年、左拾遺になると、商隠は彼に「別令狐綯拾遺書」を送り、古くからの友誼を訴え、自らの困窮した状況を述べた。高橋(3)は、執拗に二人の友誼を確認するこの書の筆致のうらには、すでに世人のなんらかの中傷があつたのではないかと推測している。さらに彼はこの書簡が開成元年ではなく二年に書かれた可能性に触れ、そうであれば進士になりながらも関試に阻まれて職に就けず、そこに王茂元からの内々の勧誘を受けて動揺をきた

していたという事態が反映されているであろうことを指摘している。

この年、令狐楚は病い篤くかけつけた彼に最後の上奏文「遺表」を書かせ、十一月に卒した。商隱は「奠相公令狐公文」を作つて彼を悼んだ。彼は翌年、王茂元の招きに応じ、その女婿になつてゐる。事態はいささか錯綜しており、商隱が令狐楚との關係に一応のピリオドをうつてから王茂元のまねきに応じたのか、令狐楚、綯父子の信頼を受けつつもひそかに王茂元に通じていたのかは明らかでない。また王茂元は李党に属してはおらず、中立的な立場にあつたという説もあるようであり、商隱が明確に背信行為をしたかどうかも確かめられない。

いずれにせよ彼はそれからも令狐綯に友情の回復と職の斡旋を執拗に訴え続け、綯は十分にはそれに答えなかつたことは事実であつたようである。桐島によれば開成五年（八四〇）、彼はすでに王茂元の女婿となつていたが、綯に就職を依頼している（「献舍人彭城公啓」「献舍人河東公啓」「酬别令狐補闕」中の「彈冠如不問 又到掃門時」の句など）。大中元年（八四七）には「酬令狐郎中見寄」なる詩で綯への友情をうたい、翌年の「寄令狐學士」詩で綯への羨望と就職依頼をうたい、さらに翌年の「令狐舍人説昨夜 西掖翫月 因戲贈」詩でも推薦を願つてゐる。大中五年には綯の協力で太学博士に任じたが、あまりに微官であつたのですぐに辞職してゐる。「舊唐書」ではこの待遇の理由を、彼が牛党から李党に走つた背信行為への綯の怒りに求めており、「新唐書」ではより一般的な視点から、牛李の双方の党人から詭薄無行と蚩謫されたことに求めている。他方、「資治通鑑」では令狐綯の「忌勝己者」という性格に求めている。

桐島は商隱の不遇の最大の理由として令狐綯との關係の破綻をあげている。川合はその条件を否定してはいないが、さらなる理由として、科擧出身だけでは昇進がかなわなくなつた時代の変化、複雑な官界の人間關係、さらに詩人として才能はあるものの現実世界で立身するそれには乏しい彼自身の資質の問題、などをあげている。

現代のわれわれの視点からあえて解釈を試みれば、やはりとりわけ目につくのは商隱と令狐綯との關係である。この両者はいわゆる鏡像關係にあつたものと考えられる。ラカン(4)(5)は、幼児がみな自分の鏡像を前にして大へん喜ぶという事実から出發する。幼児はその時点までは自らは孤立した感覚や欲望のよせあつめにすぎない（寸断された身体）。しかし彼が鏡の前でそこに一つの全体像を見出し、それを自らの姿と認める時（同一視）、そこに自我形成のモメントである理想的な原型が招来されたのであつた。以後彼はこの鏡像に籠絡され、常に理想的、虚構的、想像的な自我を求め続けることになる。人間の自我は主体とは異なるものによつてもたらされるものであり、本質的に自己疎外的である。やがて鏡像と同じ外的視像をもつ他者が登場し、他者が鏡の役割を果たすようになり、鏡像自我は他者によつて担われるようになる。鏡像自我の統合的全体性は他者に委ねられ、ついには他者に奪われてしまうことになり、彼は他者からそれを奪いかえし、他者を消しさるべく常に駆りたてられる。

「・・・欲望する人間主体は、主体にまとまりを与えるものとして
の他者を中心として、その周りに形成されます。そして、主体が最

初に対象に接近するのは、他者の欲望の対象として体験された対象なのです。

・・・「エゴ」の最初の統合は、本質的に「他我」であり、それは疎外されているのです。」

ラカンはこうした想像(イメージ)の構造を基本とした関係を想像界(L'Imaginaire)と呼称している。

この鏡像段階論には先蹤がある。メラニークライン(6)によれば、一歳前後の乳児において最も活発に作動する原始的防衛機制は分裂(splitting)である。そこでは自己は、リビドー的欲望充足的な側面と、攻撃的欲求不満的な側面とに分裂して認知される。分裂したそれぞれの部分は外部の対象に投影され、さらにその投影された自己の部分とそれを受けた外界の対象とが同一視される機制が「投影性同一視」である。この現象は単なる投影とは異なり、対象と自己の一部とが同一視されるので、彼は対象に対しても投影された部分の自己に対してとるのと同じような態度、すなわち願望充足追及的、あるいは処罰、攻撃的な態度をとりつづけることになる。

いずれにしてもこの段階においては、人間は理想的な、自我の「良い」部分の投影された鏡像自我を熱烈に追求めるか、疎外的な、自我の「悪い」部分の投影されたそれを激しく攻撃することになる。そしてある種の状況では成人後もこの行動パターンが反復されることがある、とされる。

さきに桐島の指摘を引いて、見苦しいまでの令狐綯に対する商隱の依存欲求を見たが、そうした欲求とそれが充足されない怨恨とは、綯にあてたわけではない作品にも数多くみられる。

蟬

本以高難飽
徒勞恨費聲
五更疎欲斷
一樹碧無情
薄宦梗猶汎
故園蕪已平
煩君最相警
我亦舉家清

風雨

淒涼寶劍篇
羈泊欲窮年
黃葉仍風雨
青樓自管絃
新知遭薄俗

舊好隔良縁

心斷新豊酒

銷愁斗幾千

川合によれば、自身の不運を蟬に托してうたう文学は後漢の賦からみられる手法である。一樹が無情であるという句は、頼みとする有力者が何の恩顧も与えてくれないことを表わす。「梗」は木で作った人形を指し、「戦国策」にある、木の人形が土の人形に対して、「君は雨が降れば溶けてしまう」とけなすと、土の人形が「自分は溶けてももとの土に戻る事ができるが、君は雨が降れば流されてどこかへ行ってしまう」と言い返したという寓話に基き、下級官吏が地方をあてどなくさすらうことを諷している。「蕪」は「帰去来の辞」の「田園特に蕪れなんとす」に由来している。また「風雨」の第一句「宝剑篇」は初唐期、郭震が「宝剑篇」を武則天に呈して出世した故事に、第七句「新豊酒」はやはり初唐に馬周が新豊（陝西省臨潼県）でやけ酒をあおっていたが、後に太宗に抜擢された故事に、それぞれ基いている。いずれも微賤の身から栄進した例であり、商隠の切ない願望がこめられているのであろう。頸聯「新知遭薄俗」は自らが置かれている新らしい環境で敵対的な人物に疎まれて適応できないでいる状態を指し、「舊好隔良縁」は令狐綯に対する恨みを表現しているものと考えられる。

このように彼は綯に対する依存とその栄進に対する羨望、そして自分を顧みてくれないことへの怨恨などを生涯抱き続けていた。綯は彼にとっての理想自我 (Ideal-ich) であり、彼は自己愛的・空想的・全

能的な理想化された自己、つまり鏡像自我を綯に見出し、それとの同一視の過程で、当然に自分にもたらされるはずの栄誉の持ち分を要求していたかにみえる。他方で鏡像関係に常に見られるように、綯は彼にとつて全き篡奪者であり、綯の栄達を祝し自らの不遇を歎く彼の詩文の背後には、このライバルに対する陰湿で根強い攻撃性が存在していると言えるであろう。この際限なく続けられる双教的闘争は、通常は第三項としてのいわゆる大文字の他者 (Autre) の登場によって終止符をうたれる。彼はこの絶対的他者に服し、かつそれに同一性を保証されることによつて、想像界から法と言葉の支配する世界、象徴界 (Symbolique) に入ることになる。しかしこの大文字の他者であり「父」である令狐楚はすでに亡く、彼は鏡像段階を決定的に離脱することは終生できなかったかにみえる。

他方、令狐綯の方では商隠をどのように見ていたかを考えることも興味深い問題ではあろう。大和三年（八一九）、商隠は令狐楚の知遇を得てその幕下に入り、綯とともに駢文を学んだ。すでに十代にして古文によつて名を知られていた商隠、そして父の楚の勧めで一転して駢文を学びだし、とびきりの才能を見せつけた同年輩の友人、綯にとつてもおそらく商隠は鏡像であつたように思われる。そして、やがて商隠は王茂元の女婿となる。既述のように王茂元が綯の属する牛党に敵対しているところの李党に属していたか、それとも中立的な立場にあつたかは諸説あるようであるが、たとえ後者であつたとしても、綯にとつては不快な商隠の行動であつたことであろう。しかもその後も商隠は押しつけがましく友情を強調し、執拗に推薦を求めてくる。綯と

しては当然に商隠がうとましかつたことであろう。大中五年(八五二)に絢は宰相となり、商隠はその推挙で太学博士という閑官につく。絢の官吏としての履歴にも浮沈はあつたことであろうが、この時点までには「父」の裁定を待たずとも、すでに鏡像段階における両者の事実上の決着はついており、絢は商隠にもう少し力をかしてもよかつたようにも思われる。鏡像関係の破壊的な力はなおやまずに作用していたのであろうか。

もつとも現代のわれわれの心理から彼らのそれを推し量るのは適切ではないかもしれない。宰相の地位とはいつても、それは自らの努力の及ばない政治的潮流の変化や、些細な讒言によつてたちまち覆されるかもしれないものであり、それどころか時には命さえ奪われてしまいかねない危険性をはらむそれであつた。絢としては叛服常なき商隠などに恩情を与えている余裕はなかつたのかもしれない。逆に商隠が些細な縁故を頼り、官を求めて右往左往したことも、彼が大詩人であるが故に後世問題にされたのであつて、当時としては誰もがとるであろう普通の行動様式であつたのかもしれない。われわれは商隠のあまりに異様にみえる、「侵襲的」と言つてもいいような執拗な依存、固着から、鏡像段階説などを持ち出したが、このへんは当時の状況、エトス、一般的な価値観などを考慮しなければならないのかもしれない。しかしまた、半面で現代の心理学者が指摘するような心的機制が全く妥当しないものかどうかも考慮してしかるべきであろう。とりあえず本節では自我形成に関わる鏡像段階説を引いて、李商隠と令狐絢との関係を仮説的に解釈してみた。

四. 「悲哀の仕事」をめぐつて

桐島は同時代の大詩人杜牧にも温庭筠にも悼亡詩はなく、李商隠だけが独特の抒情性をもつそれを作っていることを指摘し、それらの詩は彼の内向的個性の顕現であると述べている。そしてそれらは、彼に先立つ潘岳から元稹に至る悼亡詩とは異なり、彼が妻の姿を幻想化・理想化して象徴的に描いたこと、貴人の娘婿としての名声と誇りを失い、栄達への手づるを失つた焦りや悔しさをそこにこめていること、以後は覇気を失い、落魄した生涯を送らざるをえない状態を詠んだこと、この三点が彼の悼亡詩の特徴である、と指摘している。

悼亡詩の作製は心理的にはフロイト(7)の言う「悲哀の仕事」(Trauerarbeit) 状況に応じて「喪の仕事」とも訳される)に属している。「悲哀の仕事」とは対象喪失に伴われる悲哀の心理過程を指している。フロイトによれば対象喪失に伴われる通常の悲哀においては、最初は失われた対象を取りもどそうとしたり、あくまでも保持しようとしたりする段階が生じ、対象の断念を認めざるをえなくなると激しい失意、悲嘆の段階がこれに続く。そして最後には苛酷な現実の受容と古い対象からの離脱、新しい対象を見出そうとする心的体制の構築が始まり、悲哀の仕事は終熄することになる。実際には対象が喪失されているのに内的な幻想の世界ではその対象に対する思慕の情が続ぎ、それに対する備給が解消されないことがあり、そこからさまざまな心的問題が生じることになる。フロイトは「悲哀とメランコリー」では正常な悲哀の心理過程と病的なメランコリーのそれとを比較し、後者

においては主体は対象を自己愛的に同一化しており、したがって対象喪失は自己喪失であり、かつ、対象に対する強いアンビヴァレンツに基く攻撃性が自己に向けられる結果、うつ病に特有の自己非難や罪責感が生じると指摘している。もつとも「自我とエス」では対象備給の断念と同一化の過程に積極的な意義が与えられ、それは発達段階の初期には常に生じる機制であり、それによって第二局所論における「自我」が形成される、とまで主張している(8)。

李商隱において悲哀の仕事はどのような経過をたどったのか。桐島の指摘するごとく、彼の悲哀の仕事は特有の二面性をもっているかにみえる。一方では彼は妻の王氏を極端に虚構的理想化し、他方では栄達への道をとざされた現実的な苦境を悲しんでいる。

房中曲

薔薇泣幽素
翠帶花錢小
嬌郎癡若雲
抱日西簾曉
枕是龍宮石
割得秋波色
玉簾失柔膚
但見蒙羅碧
憶得前年春

未語含悲辛

歸來已不見

錦瑟長於人

今日澗底松

明日山頭藥

愁到天地翻

相看不相識

この詩は大中五年(八五二)、商隱四十歳の時、妻王氏が亡くなったことを悼んで作られたそれであるとされている。第三句「嬌郎」を高橋は残された愛児を指すものとし、桐島は商隱自身を指すものとし、川合は男女関係一般における男性を指すものとしている。愛児とした方が痛切な思いをひきおこすようであり、また少し後に作られた「韞氏幼名猶可憐 左家婦女豈能忘」といった句、「上河東公啓」などに徴してもその方が妥当であるように思われるが、半面で先行二句との続き具合からすると男性、つまりは商隱自身とする方が自然であるようにもみえる。この部分は解釈の分かれるところであろう。

彼は王茂元の邸宅の西亭に服喪中にも何篇かの詩を作っている。

西亭

此夜西亭月正圓
疎簾相伴宿風煙

梧桐莫更翻清露

孤鶴從來不得眠

商隱は同年、東川節度使柳仲郢の招きに応じて梓州（四川省三台県）

に赴く。そこで彼の孤独を哀れんだ柳は、身のまわりの世話をすため
の歌妓を贈ったが、彼は謝絶し、「（上河東公啓）、亡妻王氏を思
う
「李夫人」三首を作っている。桐島はこの詩について詳しい解釈を施
しているが、一首を例示したい。

李夫人其一

一帯不結心

兩股方安髻

慚愧白茅人

月没教星替

李夫人とは若くして逝った漢の武帝の愛人であり、武帝が思慕のあま
り方士をして招魂せしめ、招かれた李夫人が遙か離れた帳の中に坐り、
また歩んだありさまが望まれた、という説話が残されている（漢書）。
それほどまでに商隱は王氏を思慕していた、ということであろう。詩
では二本の帯であれば心一つに結びつけることができるが（梁武帝
「有所思」、一本ではそれができず、笄の股は二本なければ髻をしつ
かりと止めることはできない、と、いずれも相互の愛情がなければ愛

は成就しないことを詠う。第三句「白茅人」は方士を指し、第四句で
は妻を輝かしい大きな月に、妓女を小さな星にたとえている。以下の
二詩においても幻想的な美しい王氏の姿と、尽きることのない彼の思
慕の情が詠われている。

他方、こうした思いと矛盾するようにも思われるが、商隱は妻が亡
くなったことよって貴門との関係が絶たれたことをはげしく歎く。
桐島が跡づけているとおり、彼はもともと進士同年及第の韓瞻（香奩
集）の著者韓偓の父）が王茂元の子女と結婚したことを羨む詩を作っ
ており（韓同年新居餞韓西迎家室戲贈）、自分の方が成績がよかつた
のに君の方が先に貴門に迎え入れられた、などと、戯れにしてもつま
らぬ愚痴を述べている。もつとも高橋はこの詩に単なる羨望ではなく、
令狐楚と王茂元の何れに与するか困惑していた彼の微妙な心情が投影
されていると解釈しているが、そうであつても彼が韓瞻の立場を羨望
していたことは確かであろう。王氏没後、商隱は王氏邸宅内の西亭に
蟄居していたが、妻の兄の王十二兄と韓瞻とが彼を慰めようと小宴に
招いた。彼は腹疾にことよせてその招きを断り、七律を作っている。
この詩でも彼は、かつては自分も王氏一族の門庭につらなっていたが、
今やその榮華は韓瞻一人のものである、と歎く。次いで彼は同年、前
述のように梓州に赴任するが、その時に韓瞻に贈った詩にも同様の傾
向が見てとれる。

赴職梓潼、留別畏之員外同年

佳兆聯翩遇鳳凰

雕文羽帳紫金牀

桂花香處同高弟

柿葉翻時獨悼亡

烏鵲失棲常不定

鴛鴦何事自相將

京華庸蜀三千里

送別咸陽見夕陽

ここでは韓瞻（畏之員外）と自分とはともに幸福な結婚をしたのに、今や自分だけは妻を失い、その上に韓瞻は相変わらず幸福な生活を送っているのに、自分は遙か彼方に都落ちしなければならぬ、と、妻を恋うと同時に韓瞻の境遇を羨むような内容が述べられている。要するに彼は桐島の指摘するとおり、貴門との関係を失い、榮達への道が閉ざされたことを深く歎き、義兄の韓瞻を羨望する、という、極めて現実的な心情をもっていたのであつた。

純愛と打算、それらは全く抵触するというわけではないにしても、いくぶん奇異の念を抱かせる併存であり、どちらがより深い心情なのか問いたい思いもわく。現代風に解釈すればここには一種の分裂 (Ich-Spaltung) という機制が作動しているように考えられる。この概念は当初は有名な「狼男症例」(ある幼児神経症の病歴より) (9) において、女性における去勢の現実を否認する幻想的自我とそれを承認する現実的自我との分裂と並存という現象に対して用いられた表現で

あつたが、前述のように、後にクラインらによつて洗練変革され、前エディプス期の最も重要な原始的防衛機制としてとり上げ直されることになった。それはまた軽度の表現形態としては、自我の一部で不安や苦痛を感じながら、同時に他の一部で平然と享樂に耽るような、通常は理解しがたい心理現象として現れることもある。これは解離 (多重人格) や抑圧 (容認しがたい心的内容を無意識に追いやって存在しないものとみなす) とは異なり、一方が隠蔽されるのではなく同時に両者が並存している極めて特異な心的状態である。あるいはこうした発想は現代人のものであり、商隠において思慕と野心とは渾然と融合していたのであろうか。

小此木 (10) は対象喪失の苦痛から逃避し、悲哀の仕事の達成を妨げてしまふさまざまな現象を論じているが、その第一に見棄てられる不安と幼児的退行をあげている。失つた対象にあまりにも強い依存関係をもち、その対象なしには自立できない人間がその依存対象を失つてしまふと、情緒危機のパニックがすぎても不安が続いてしまふ。この不安のために、彼はそれ以上に悲哀の仕事をおし進めることができなくなる。商隠の依存的で不安定な自我は、妻自身の存在と、必ずしも現実的な利得が十分にもたらされたわけではないにせよ王氏一族という権門に連なっているという意識によつて支えられていたかみえる。この支えが突然に失われて彼は自失し、氣力を失い、慰藉を求め、あるいは支えを回復しようと試みる。彼が義兄たちに贈つた詩には悲傷とともに多大な自己憐憫がこめられており、そこには慰藉へ

の哀願と同時に、現実的な関係継続への要請がこめられている。

また小此木は悲哀の仕事を妨げる現象として、「過度の理想化」をとり上げている。失われた対象は幻想の中で自分に都合のよい存在としてつくり上げられる可能性がある。ここでは対象との実際の関係、そこに常に伴われるアンビヴァレンツが全て捨てられ、対象は永遠の理想像として心内で備給を受け続けることになる。それは悲哀の仕事の進展をそこで途絶させてしまう。管見ではとりわけ彼のように突出した文才をもった人間は、言語によって現実を変更できるといふ、誰もが幼時期に抱きながらやがて放棄してしまう全能の幻想を成人後も抱きつづけることが多いのではないだろうか。全能性を守ることは言語の主体としての自己を守ることであり、逆に自己を保つためには潜在的にせよ、この全能性の幻想を抱き続けなければならない。彼は招魂のためにも理想化された妻の姿を描き続けなければならない、しかしそれは悲哀の仕事途絶させることでもあった。見捨てられ不安は妻の理想化を促進し、理想化は逆に、もはやないという意識によって見捨てられ不安を強化する。両者は相俟って悲哀の仕事の遂行を妨げたことであろう。

ところで桐島は商隠とは対照的な元種の悼亡詩に言及している。彼女は元種がその妻章叢のために詠んだ悼亡詩、「三遣悲懷」詩を分析し、そこには生前の妻が貧困に耐えつつ自分を支えてくれた愛情が生きて描かれ、献身的な妻の行動が具体的、現実的に表現されていること、夫婦で味わった同甘同苦への愛惜があること、を指摘している。そして商隠が妻の没後、意気消沈し、仏教に救いを求めようとしたこ

とは逆に、元種がやがて継室裴淑を迎え、妻として終生つれそつたことをも指摘している。桐島の指摘はまことに適確であり、「悲哀の仕事」という分析用語は用いていないものの、その意図するところは完全に洞察されているといえるであろう。元種は妻の喪失を正面から受けとめ、内面的な悲哀に耐え、失った対象と自分との関わりを整理し、その悲哀の仕事を達成した。それ故に継室を得ることができ、彼女との安定した関係を終生維持することができたのであった。元種の健全な自我が達成しえたことを、商隠の脆弱な自我は達成することができなかった。半面で前者の健康な世俗性はその作品を凡庸なものとし、後者の現実吟味能力を欠いた幻想性はその作品に大いなる輝きを与えただかにみえる。

ところで柳仲郢が商隠を哀れんで贈ったのは歌妓であったが、それがもし権貴の女であつたら彼はどのように対処したであろうか。亡き妻への純愛のために断固として謝絶したのか、それとも再び訪れた立身機会をわがものにしようとしたであろうか。その時こそ彼は悲哀の仕事に正面から立ち向かわなければならなかつたことであろう。しかしそうしたことは実際にはおこらず、彼の悲哀の仕事は終熄に至らなかつたのであつた。

五. 恋愛詩について

無題、借題詩の多くは七言律詩という形式をとり、その中心をなすのは二種の対句である。対句とは何か。筆者はかつて対句の特質につ

いて述べたことがあるが(11)、ここでさらにそれを敷衍して考察してみたい。対句とは形式が同一でありながら内容は対比的な二つの命題が、にもかかわらず同一の主題を共同で支えあうような事態である。二つの命題はそれぞれに、アモルフで捉え難い世界を独自のペースペクティブから裁断し、ある象面をとり出したものであり、その二者が相互に依存しつつ相互に限定しあう対比性をもって同一主題を指向する時、世界は他とは異なる独自の位相において把握されるであろう。

任意の例として、唐詩から雪に関する対句をとり上げてみたい。

雲近蓬萊常五色

雪殘鳩鵲亦多時

(杜甫「宣政殿退朝晚出左掖」)

ここでは雪は天子や宮廷の尊厳を彩る、何か高貴な輝きをもつものとして描かれ、仙界の五色の雲と対比されることよってさらに幻想的な神聖さが加えられることになる。世界は一種の天上的な崇高さをもつて立ち現れる。

萬里寒光生積雪

三邊曙色動危旌

(祖詠「望薊門」)

前句だけを見ればそれは杜甫の句と同じく雪の積んだ光景を詠じたも

のであるが、その雪景色が、悲惨な征途、勇氣、絶望、といった極限的経験を内に秘めた三辺(三つの辺境、つまり異民族征討の最前線)の曙色と対比される時、雪の意味は一変する。雪の白さと冷たさとは生への切望、安寧への希求、望郷の思い等を峻拒する絶対的な隔絶感の象徴である。世界は苛烈で非人間的な超越性といった位相において把握されるであろう。

千巖曙雪旌門上

十月寒花輦路中

(李頎「送李回」)

曙光に映える雪という光景自体は祖詠の対句によく似ているが、それは行幸の途上にある寒花と対比されることよって、祝祭の予兆にも似た輝かしい瑞祥性、多幸性を帯びるに至る。

雪という気象現象はそれ自体ではあまり確定した意味をもたず、それはどのようなペースペクティブから見られ、捉えられるかによつて変化する。あたかも一つの平面が決定されるためには二直線が交わらなければならないように、雪は五色の雲や辺境の曙色、輦路の寒花と交叉することよつてその意味が明らかになり、同時にそれが含まれる平面、その現象が生起する世界の位相も画定されるであろう。そこには二方向を指向する相互的な効果が発生する。第一に交点における求心的収斂性、すなわち雪はそれぞれの事象と対比されることよつて意味が確定され、しかしそれは同時に対比された諸事象の意味をも

確定することになる。たとえば杜甫詩の雪に對比された雲は、人の世のはかなさを表わすものではなく（王維「世事浮雲何足問」、天子をまどわせる奸臣という寓意でもなく（李白「總爲浮雲蔽白日」、人間の営みを拒むような荒々しい大自然の象徴（杜甫「塞上風雲接地陰」）でもない。第二に、対比の結節点となる事象の意味が明確化されると同時に、それはこの平面全体のあり方、その世界の位相全体を特有の雰囲気で満たし、その趣意（import）ですみずみまで染めあげる。対句は遠心的拡散性をもつに至るのである。

このようなものとして対句は詩の流れの中で明確な周郭に守られたかつその内部に強いコントラストとその均衡に基く確定的な主張をもった、相対的に自立した構造体として存在している。前野(12)は対句の種類として正対、反対、流水対、仮対、また特殊なケースとして文章に多い隔句対などをあげているが、以上に述べたような効果は前二者に伴われることはもとより、仮対や流水対においても多少希薄化した形においてであれ、持続されているものと考えられる。

ところで律詩の特徴は、こうした対句が連続して用いられる点にある。再言すれば、対句はアモルフな世界をある一つのペース・ベクティヴから裁断し、特有の位相をとり出した自立体であるから、頷聯と頸聯とはそれぞれに独立しており、直接的な関係はない。しかし律詩においてはこの両者が、あたかも対句において二句が對比されたように對比され、律詩全体を共同で支えている。とはいえこの両者、対句と対句どうしの対比であるメタ対句のあり方はやや異っている。

対句において、二句の関係は弁証法類似のそれである。ある事象を

二分し、それぞれの視点から対象を表現する場合（正対）であれ、AであるがしかしBである、と逆の意味を對比させる場合（反対）であれ、AだからBであると述べる場合（流水対）であれ、全体の意味は無関係であるのに文字という面でのみ対比させる場合（仮対）であれ、およそ対比という現象には対立した側面と類似した側面とが存在しており、その両者が相俟って新しい全体像が明確に浮き彫りにされる。対義結合（撞着語法、oxymoron）という修辞法がよく示しているように（遠くて近きは男女の仲、慇懃無礼）、対立する二者はより大きなコンテクストにおいては同一者の二相であることがあり、逆に、類義語が対比的枠組みの中にはめこまれることによって対義語となることもある。

・・・「融合と分離の原則」とは、対構造のそれぞれの極であるとともに同時にまさにその理由によって同一の性質を共有する、という逆説に負うものである。任意の二つの事象、観念AとBとは対構造化することによって対極物として切り離し対置させたり、また同一性の二相であるというふうに解釈することが可能となる。(13)

これは類似したレトリック、対比（antithesis）、並行（平行法、parallelism）、同形節反復（isocolon）などにも妥当する原則であろう。そしてここで「同一性の二相」と述べられたその同一性が成立する場、さきに指摘した、対立する二者が類似するに至るより大きなコンテクスト、それが、対句の疑似弁証法によって統合された全体、二つのペース・ベクテ

イヴの交叉によつて決定される一つの平面、ある世界の位相ということになる。「疑似」と形容したのは、対句における二句は厳密な意味で対立するものとは考えられないからである。

メタ対句において両者の関係はどのようなものであるのか。この詩形の完成者である杜甫の著名な作品にみられる若干例をひいてみたい。

桃花細逐楊花落

黃鳥時兼白鳥飛

縱飲久拚人共棄

懶朝眞與世相違

(「曲江對酒」)

江間波浪兼天湧
塞上風雲接地陰
叢菊兩開他日淚
孤舟一繫故園心

(「秋興」一)

無邊落木蕭蕭下
不盡長江滾滾來

萬里悲秋常作客

百年多病獨登臺

(「登高」)

羞將短髮還吹帽

笑倩旁人爲正冠

藍水遠從千澗落

王山高竝兩峰寒

(「九日藍田崔氏莊」)

桃花が散り鶯が飛ぶ春景色と勤務にあきたりないこと、髪の毛が薄くなり、人に帽子を直してもらうような日常の一齣と遙かに遠い雄大な風景、荒々しい天地の光景と落魄して故郷を思う感情・・・、頷聯と頸聯とは無関係であり、ただそこにとり集められ、出会わせられることによつて一つのゲシュタルトを形成しているかにみえる。

海内風塵諸弟隔
天涯涕淚一身遙
惟將遲暮供多病
未有涓埃答聖朝

(「野望」)

周知のごとくゲシュタルト説は、マッハの「感覚の分析」を先蹤とし、エーレンフェルトの旋律のゲシュタルト質(あるメロディを移調してもメロディの感じは変わらないという性質)という概念によつて初めて提起されたが、一九二二年に発表されたウエルトハイマーの「仮現運動」に関する実験的研究によつて新たな心理学説として確立され

るに至った(14)。彼はある時間間隔において二つの位置に光点を提示したが、その実験ではそれぞれの位置に光点の個々の印象が得られるのではなく、一方から他方への光点の運動が見られ、二点の間に対応する光点が存在しなくても運動知覚が経験されることが立証された。以後一連の実験によつて、彼はヴント以来の要素心理学を否定し、心理現象は一つのみとまりをもつゲシュタルトを示し、全体は部分の総和以上のものであると主張するに至った。その後、この学派に属する心理学者たちによつてゲシュタルトを形成しやすい条件が考察され、それらはよき形態の法則と呼ばれている。

ゲシュタルト学説成立の十二年前、一九〇〇年に、フツサール(15)は「論理学研究」を刊行し、「基づけ」(Fundierung)という概念を展開している。彼によれば

或る α そのものが、本質法的には、それを或る μ と連繋する或る包括的統一体の中でのみ実在しうるにすぎない場合、われわれは、或る α そのものは或る μ による基づけを必要とする、と言ひ、また或る α そのものは或る μ によつて補足される必要がある、とも言う。

(分節肢が相互に独立している時は)相互に対して相対的に独立的な諸内容(その際には、全体はその断片としてのこの諸内容に分解されうる)が、それらを「結合する形式」としての新しい内容を基づけるのである。

立松の訳注によれば、ゲシュタルト概念と「基づけ」というそれとは、発表年からして直接の関係はない。フツサールはすでに一八九一年に刊行された「算術の哲学」の中で、単なる幾何学的図形としての図(Figur)から形態(Konfiguration)としての〈図〉に遡るうとしており、「論理学研究」ではこうした〈図〉と分節肢の相互関係を論理の領域で、全体と部分のアプリオリな本質関連から解明しようとしたのであった。

よき形態の法則でも「基づけ」のそれでも異なる複数が一つの全体を形成することが指摘されており、それはメタ対句の構造解明にも適用できる概念であるように思われる。かつての構造主義者たちの主張に倣つて言えば、潜在的類似性をもった対句は人間の元型的な二つの思考様式の一方、隠喩のそれに属し、メタ対句における無関係な二者のとり集め、出会い、近接を介した「基づけ」による全体の形成は換喩のそれに属するであろう(ただしゲシュタルト法則には類似やその他いくつかの法則も存在しているが)。さきの比喩をさらに用いれば、対句という二直線によつて決定された一つの平面は、同様に決定された別の平面と並立させられることによつて一つの新たな立体性、ある空間を形成する。頷聯と頸聯の鋭い断絶とその邂逅によつて生み出されたこの空間は、創造的な対象世界の再構造化であり、まったく新しい意味の生成であろう。原理を異にする二種の対比の階層的重合、それが律詩の本質である。

この過程を読解の時系列に即して言えば、まず首聯では一つのテーマ、一つの問題、あるいはその予兆が提示され、頷聯ではそれを承け

つつ、しかしある面では飛躍した新たな場面が対句として提示される。

頸聯ではさらに異質な場面がさらに対句として提示され、尾聯で何らかの総合的、結論的感慨が示されて詩は終結する。このプロセスは絶句の起承転結というそれにある点で類似している。絶句は古来、「第三句を以て主と爲す」（三体詩「七言絶句」）と言われるように、承転の間に断絶と飛躍があることがよしとされているが、律詩においても領聯と頸聯の間にそれが望まれるであろう。他方、絶句と律詩において異なるのは、後者においては第一句と第二句とがすでに起承という関係をなしており、他方で第一、第二句で形成される首聯と第三、四句の領聯にも起承関係がある、という両義性が存在する点であろう。領聯は「承」という機能と「転」という機能をあわせもち、しかし一般には後者の方が優越しているかに見える。詩意の流れは第一、二句で「起承」の形をとり、ついでそれはいく分「承」の要素を保ちつつも大きく飛躍して最初のプラトリーに滞留する。そして再び飛躍して別のプラトリーに至ってそこに滞留し、三たび飛躍して終結に到達する。首聯と領聯との間にはある断絶があり、領聯と頸聯との間にはさらに大きな断絶がある。この意味で首聯と領聯との関係を「起承」と単純に性格づけることはできないが、領聯と頸聯との関係を「承転」と性格づけることは可能であろう。

もつともこれは杜甫の作品のような典型的な律詩に妥当することであって、絶句において「首尾率直にして婉曲無き」作品があるように、律詩においても領、頸聯の断絶、飛躍があまり明確でない詩も多く存在する。たとえば前述の祖詠のメタ対句、

萬里寒光生積雪

三邊曙色動危旌

沙場烽火侵胡月

海畔雲山擁薊城

領聯と頸聯とは無論、異なるペースクティブから截り取られた世界であり、ある程度の断絶はあるものの、辺塞の風物や光景という点では共通しており、大きな婉曲はないと言える。

要するに律詩の構造的な中心は二つの異質な対句、二つの異質なプラトリーの邂逅とそこから生成される新しい意味世界にあり、首聯はそれを準備する前段階であり、尾聯はその総合的再認である。メタ対句の指示するものは律詩全体のモチーフであり、首尾聯はそれを確定し、一つの完結体を構成するための枠と言えるであろう。たとえば前掲「曲江對酒」では無心で微細な自然に気づき、それに心奪われるほどの深い絶望と諦念がモチーフであり、「九日藍田崔氏莊」では永遠に存在する大自然に対する自らの日常の空しさといとおしさのアンビヴァレンツが、「秋興一」では後世に言う一種の被造性の感覚、世界は無限に主体を凌駕し、主体は一切の意味なしに耐えるしかないという感覚と、にもかかわらず表出されざるをえない自傷の思い、などがそれであるか。

ところで筆者はかつて律詩読解の特徴として事後性（Nachträglichkeit）をとり上げたが(11)、この概念は律詩の対比とその複合という空間的構造と共起的な時間的モメントである。事後性とは

フロイトがヒステリーの女性「カタリーナ」症例や「科学的心理学草稿」などにおいて、また最も典型的には著名な「狼男」症例において展開した概念である。それは被分析者のある時点における体験、印象、記憶痕跡、とりわけ外傷的なそれが意味文脈の中に十分には統合されず、その後の体験や心的発達によって修正され、新たな意味や心的効果を獲得する過程をさしている。この概念は、精神分析が全ての心的事象を過去の生活史的生起に還元する直線的決定論に依拠している、という批判に対する、分析側の有力な反論の一つであった。対句において前句の意味は後句を読み、それと対比されることにおいてその十全な意味が理解されることは前述した。雪という気象現象は多様な象面をもち、単独では十分に確定した意味をもたず、他の句中の別の現象と事後的に対比されることによつて、いずれの象面がとり上げられているかが明らかになる。事後性はより大きな断絶を伴うメタ対句においてさらに重要な機能をもつ。たとえば、「登高」において、頸聯を讀んではじめてわれわれは、頷聯がのびやかな大自然を賛美したものであることを、人間の営みを無限に凌駕する苛酷な超越者としてそれを認識していることを理解するのである。二つのプラトー間の断絶は事後的に架橋されなければならない。それは読者に不自然な抵抗と緊張を与え、両者を統合するように強制する。この強制性は形式を強化する心理的なモメントであろう。

李商隱の七律恋愛詩にはこのような断絶や飛躍、事後性のモメントなどがないように思われる。

一春夢雨常飄瓦
盡日靈風不滿旗
萼綠華來無定所
杜蘭香去未移時

〔重過聖女祠〕

金蟾齧鎖燒香入
玉虎牽絲汲井廻
賈氏窺簾韓掾少
宓妃留枕魏王才

〔無題〕

春蠶到死絲方盡
蠟炬成灰淚始乾
曉鏡但愁雲鬢改
夜吟應覺月光寒

〔無題〕

紅樓隔雨相望冷
珠箔飄燈獨自歸
遠路應悲春晚晚
殘宵猶得夢依稀

〔春雨〕

神女生涯元是夢

小姑居處本無郎

風波不信菱枝弱

月露誰教桂葉香

(無題)

これらの対句は確かに文字上は対比されているが意味的な対比はなく、またメタ対句に形式的なパースペクティブの転換はあるが、事実上の断絶、異質性は存在しない。萼緑華という仙女が来ることは杜蘭香という仙女が去ることによって何らかの影響を受けるわけではなく、黄金の香炉やきしる轆轤といった深窓の風物は、禁断の恋らしき経験によつて新たな意味を得たとは言いがたい。そこに断絶はなくむしろ連続性が優越し、同一の情景をやや異なる視点からくり返し語り、それを修飾しているにすぎない。それは「婉曲」を欠くどころか、「首尾率直」ですらない。漠然とした気分は次第に濃度を増すが、明確な詩意の流れをたどることはしばしば困難である。杜甫によつて完成され、頂点に達した七律の構造的完結性は、ここで内部から崩壊しつつあるかにみえる。

にもかかわらず商隠が七律という形式に固執したのはなぜか。それは彼が官吏としての立身を指向し、伝統的価値観をそのまま継承した世俗的生活者であったからであろう。しかし同時に強固な形式性はその意味を次第に変化させていったように思われる。整然とした形式は

本来、世界を天理に基いて秩序づけ画定しようとする士大夫階層の経世への意志が自らとる構造であり、あるいはその挫折の悲傷を同じく士大夫として表出するのに適したそれであった。しかし商隠においてそれはその内実を失い、形式性はアモルフな気分や情調の放恣な溢出拡散を防ぐ枠、それを保存する容器としてのみ機能しているかにみえる。それは「詩」が「詞」へと変化する一歩前の姿であったのではないであろうか。

錦瑟

錦瑟無端五十絃

一絃一柱思華年

莊生曉夢迷蝴蝶

望帝春心託杜鵑

滄海月明珠有淚

藍田日暖玉生煙

此情可待成追憶

只是當時已惘然

この美しい詩は、美しくはあるが何を詠っているのか判然とせず、古来多くの解釈がなされてきた。劉学鍇(16)らは四十二種の注や解釈を引き、それらは結局は悼亡説と自傷説とに分類できるとし、自らは後者の立場をとっている。まず悼亡説は通常は悼亡詩と考えられている「房

中曲」中の二句「歸來已不見 錦瑟長於人」と「錦瑟」という表現が共通しているところから生まれた。しかしこの句は人はすでに亡くなったが遺品は依然として存在していることを言っているだけであつて、錦瑟が亡妻の象徴という訳ではない。亡妻の象徴であるならば五十絃とは没時五十歳ということになるが、それは事実に反する。第二に、華年が亡妻と過した時期を指すとすれば、頷腹聯にそれを敷衍する表現がありそうなものだが、それがない(彼は頸聯を腹聯と呼んでいる)。

第三に、末聯(尾聯)が悼亡説では説明できない、と指摘されている。自傷説に立てば、錦瑟とは不遇であつた自らの生をたとえたものであり、「五十弦」とはほぼ製作時の作者の年令にあたる。「莊生」の句における「夢」とは彼の他の詩「憐我秋齋夢蝴蝶」「枕寒莊蝶去」他の彼の用法に倣しても、生が夢幻の如く空しいことを表現しており、「望帝」句における春心とは追求されるべき理想であり、またそれは「傷春」と同じく自傷とともに憂国の感情をも含み、杜鵑とはそうした雄図を達成できなかった自身を指す、とされる。「滄海」句も本質的には「望帝」句と同様の苦悩を表現したものであるが、後者はより「淒厲」の情調に近く、前者は「寂寥」に近い。「珠有淚」とは才能が海中に沈んで世に用いられない歎きを暗示している。「藍田」句も追求する理想が遠望すれば存在したが近づくとも消失して手中にすることができず、「虚無縹緲の域」に属することを述べている。要するに頷腹二聯は華やかにし昔の具体的な出来事を述べているのではなく、瑟声の「迷幻、哀愁、清寥、縹緲」といった調子にことよせて過去の満たされざる人生の諸相を詠っている、というのである。

劉の主張する悼亡説批判の根拠はあまり説得的でないように思われる。そもそも「五十」という数字になんらかの年齢を対応させることが必要であろうか。かつて瑟は五十絃であつたが、その音色があまりに悲しかったので秦帝が半分にした、という説話をそのまま受けとれば十分ではないであろうか。錦瑟が妻、またはその思い出に関わるならば、次の聯ではそれに関わるイメージが出てきそうなのであるが、莊生、望帝は男性ではないか、と云うが、重要なのは詩句全体の意味するところであつて、この指摘は適切ではなからう。馮浩は「莊生」の句から「鼓盆」の説話、すなわち莊子の妻が亡くなり恵子が弔うと、彼は箕踞し盆を鼓して歌つたという節を連想し、悼亡に関連づけているが、劉は鼓盆と蝴蝶の夢とは何の関係もないと云う。この点はその通りであろう。朱彝尊は蝴蝶、杜鵑とは妻がすでに化して去ってしまったことを言い、「珠有淚」はこれを哭すことであり、「玉生煙」はこれを葬ることであると言ふ。それに対して劉はこれらの聯は華年のことに少しも触れていないではないかと反論しているが、ある事態を傷むその傷み方はさまざまであり、楽しかった往事について綿綿と述べ、最後にそれを傷む場合も、その事態にはあまり触れず、悲しみをさまざまに仕方てひたすらに表現する場合もあろう。もつとも朱のように一句ごとに寓意を読みとるのも牽強にすぎようか。また筆者は以前から疑問に思っていたことであるが、「滄海月明」という句は單純に冷たく澄んだ美しい光景と考えてよいものであろうか。筆者はこの句から、かなり現代的世俗的にハワイとかカリブ海とか南洋諸島の夜景を想起してしまうが、古代の中国人にとって海とはそのようなイメージを喚

起するものであったのか。筆者はこれについて明確な意見を述べるほどの知識をもつてはいないが、海は溟溟渺渺とした暗く無限なものとして想像されていたのではないかと考える。この点で劉が滄海の遺珠という句を引いているのは、海の広大さや珠の見出しにくさを強調したものとすれば領けるように思われる。

尾聯「此情」とは愛情であれ不遇感であれ、過去の思いであるのか現在の思いであるのか、また「當時」とは過去なのか現在なのか。この詩が悼亡詩であり、「當時」が過去であるならば、楽しい妻との生活がその時すでに惘然としていたとするのは理窟に合わない、と劉は指摘する。過去の楽しい現実もどこか不確実な、あるいは不安の予感に彩られたものであった、と解釈するのは、あまりに近代風にすぎようか（朱は妻が多病であったのではないか、と言うが）。「此情」を現在の思いと解釈すると、筆者はかつてあるうつ病者が述べた訴えを想起してしまう(17)。彼は「(自ら病因の一つと考えるトラブルから)もう一カ月経つたとか、そう思った時からもう二週間経つたとか驚いていたが、その期間がどんどん短かくなっていく。その時からもう三日経つたとか、昨日から丸一日経つたとか考えると胸苦しくなる。・・・そして二週間前はまだよかった、とか、来週も今の方がまだ良かったと思うだろうか、と考える。』ながらへばまたこのごろやしのばれむうしとみし世ぞいまは恋しき」という歌のところがとてもよくわかる」と言う。抑うつ状態におけるこのような、時間の推移に主体がついていけず、悲哀や悔恨に苦しめられる体験 (Remanenzと呼ばれる) がこの句の背後に存在しているのかどうか。それもあまりに近代風な見方

にすぎるのであろうか。

他方、劉の自傷説もあまり説得的ではない。彼は元好問の七絶を引く。「望帝春心託杜鵑、佳人錦瑟怨華年。詩家總愛西崑好、獨恨無人作鄭箋。」この詩について彼は、最初の二句は商隱の詩句を転用したにすぎないようにみえるが、実は商隱の世に用いられず空しく老いてゆく悲しみを示唆したものであり、それは「鄭箋」という表現に明らかである、と言う。彼はここで一般向けの西崑体の詩と士大夫にふさわしい詩経との対比を強調しているかにみえる。筆者の読解力は太だ心許ないが、しかしこの詩を素直に読めば西崑体の華美なだけの詩は愛好されやすいが、商隱のそれは難解多義的であり、鄭箋に匹敵するほどの明快な注解書が作製されることが望まれる、と言っているように思われる。「錦瑟」が士大夫としての自傷の思いを詠っている、とまでは言っていないのではないか。ともあれ元好問がどのように言おうと、この作品が自傷詩であると確定したことにはならないであろう。不遇な状況や心中に秘めた思いというモメントはあまりにも一般的過包括的であり、それを援用すればいかなる詩句も解釈できてしまうであろう。かつてロジェ・カイヨワはいかなる心的現象をも説明できてしまうフロイト理論を「了解過剰」と嘲笑したが、事態は聊かそれに類似している。それは明確な誤りと言えるわけではないにしても極めて凡庸な解釈であり、それによって詩の鑑賞が深められるようなそれではない。

筆者には「錦瑟」がどうしても悼亡詩のように読めてしまうが、かといって明確な根拠があるわけではない。

要するに「錦瑟」には美しくも曖昧模糊としたイメージがつらねられており、全体の詩意を理解することは困難である。梁啓超は、商隠の「錦瑟」「碧城」「聖女祠」などの詩は十分に理解することはできないが、ある神秘的な美的価値が感得されると言う。それを現代風に敷衍すれば次のようにでもなるうか。それは明確なシニフィエをもたない、たゆたう情調の堆積であつて、ロールシャツハ図のごとくわれわれのファンタスムを受け入れる。李商隠は七律という伝統的規範的形式を継承しながら、美的にイメージ化された喪失感、不全感をそこに封入した。それは読者の投影を最も誘発しやすい一般的な情態性であり、われわれは自らにとつて重要な意味をもつ、しかし自らに帰属するとは認めていないテーマを、その詩のテーマとして見出すことにならう。

文献

- (1) 川合康三 「李商隠詩選」 岩波書店 二〇〇八年
- (2) 桐島薫子 「晚唐詩人考」 中国書店 一九九八年
- (3) 高橋和巳 「詩人の運命——李商隠論」 河出書房新社 一九七二年
- (4) Lacan, J. (宮本忠雄他訳) 「エクリー」 弘文堂 一九七二年
- (5) Lacan, J. (小出浩之他訳) 「精神病(上)」 岩波書店 一九八七年
- (6) Klein, M. (狩野力八郎他訳) 「分裂的機制についての覚書」(メラーニ・クライン著作集4) 誠信書房 一九八五年
- (7) Freud, S. (井村恒郎他訳) 「悲哀とメラノコリー」(フロイト著作集6) 人文書院 一九七〇年
- (8) Freud, S. (井村恒郎他訳) 「自我とエス」(フロイト著作集6) 人文書院 一九七〇年
- (9) Freud, S. (小此木啓吾訳) 「ある幼児神経症の病歴より」(フロイト著作集7) 人文書院 一九七二年
- (10) 小此木啓吾 「対象喪失」 中央公論社 一九七九年
- (11) 塚本嘉壽 「漱石、もう一つの宇宙」 新曜社 一九九四年
- (12) 前野直彬 「春草考——中国古典詩文論叢」 秋山書店 一九九四年
- (13) 森常治 「ケネス・バークのロゴロジー」 勁草書房 一九八四年
- (14) Herrmann, Th. : Ganzheitspsychologie und Gestalttheorie. (in : Die Psychologie des 20. Jahrhunderts) Bd1. Kindler. Zurich. 1976
- (15) Husserl, E. (立松弘孝他訳) 「論理学研究」第三卷 みすず書房 一九七四年
- (16) 劉學鐸他 「李商隠詩歌集解」 中華書局 北京 一九八八年
- (17) 塚本嘉壽 「中国古典と漢字の精神病理学」 勉誠出版 二〇〇九年